

“シロイカ” 漁況と流況との関係についてのノート

森 脇 晋 平*

“シロイカ”は九州北西沿岸から山陰沿岸各地の小型一本釣り漁業の主要な漁獲対象生物であるが、このイカの漁獲量の日々変動を流況の変化と対応させて調べた小川(1983)は、両者の間に有意な相関を見出ししている。すなわち、山口県の日本海沿岸水域では、南東流の発達したときに“シロイカ”が補給され、漁獲量は上昇する、という。しかし、小川(1983)の結果は、山口県日本海沿岸漁場という限られた場所での一時期の調査に基づいたものであって、このような漁況と流況との関係が、どこでもいつでも成り立つかどうかは調査の余地がある。そうした観点から、ここでは島根県沿岸水域から得られた既存のデータに基づいて、“シロイカ”漁況と流況との関係を調べた。

漁獲量変動の資料としては、測流点付近の海域で操業する漁船が多数所属している大社町漁業協同組合の仕切伝票から測流期間の毎日の漁獲量と出漁隻数を集計した。大社沖における“シロイカ”一本釣りの漁場は過去の調査から図1のような範囲にある(東海大学, 1979)。図2に1晩1隻当りの漁獲量(以下、CPUEという)の日々変動を示してある。ただし、大社町漁協では日曜日は市場が休業するため、土曜の夜から日曜の深夜にかけて漁獲された漁獲物は月曜日のセリにかけられる。それゆえ、月曜日の仕切伝票には2日分の漁獲量が計上されている。ここでは便宜上、月曜日の“水揚げ量”を1/2に分配して日曜日と月曜日の2日分のCPUEを求め、図2には白丸で示した。また、8月5日、6日、および12日は荒天のため水揚げはない。調査期間内でCPUEの増加がみられているのは、(i)7月22日~23日、(ii)7月28日~29日、(iii)7月30日~8月1日、(iv)8月4日~7日、(v)8月9日~11日である。

用いた流れの計測データは山崎・伊藤(1982)による。計測場所は島根県日御崎沖の水深165mの地点(図1)で、測流された水深は底層の150m層である。調査期間は1981年7月20日から8月10日であった。測流結果を進行ベクトルとして示す(図3)。この海域の流れは

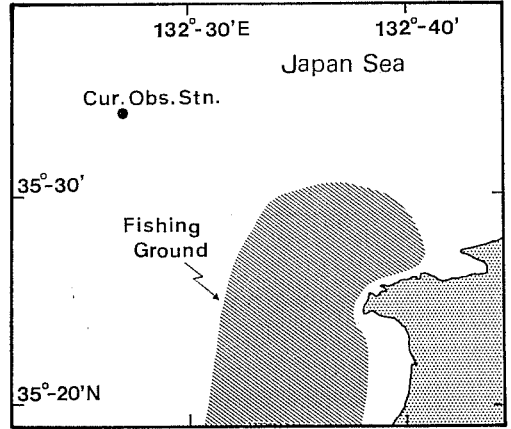


図1 流速計による流況の測定位置と“シロイカ”漁場

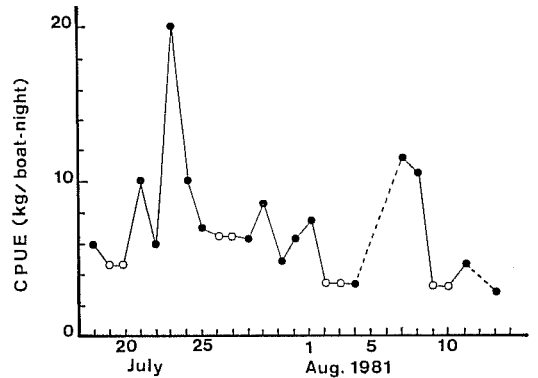


図2 “シロイカ”の1晩1隻当り漁獲量(CPUE)の日々変動

全体的な傾向としては北東方向へ流れているが、南西方向への弱い流れが生じる期間がある。すなわち、(i)7月22日~25日、(ii)7月30日~8月1日、(iii)8月5日~6日である。8月10日の午前中に調査を打ち切ったためはっきりしないが、8月9日~10日以降も流れの停滞が生じ始めているように見うけられる。これを図2の

* 島根県水産試験場

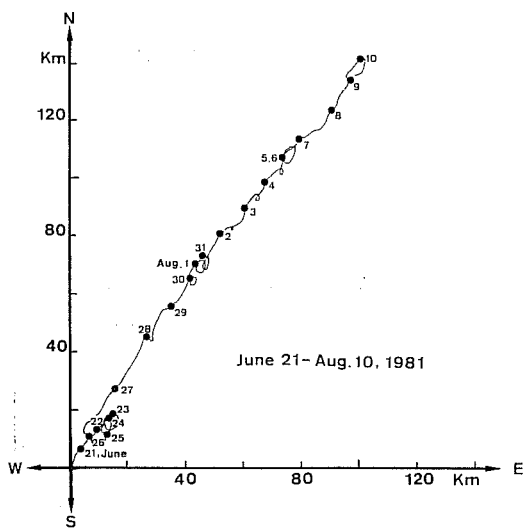


図 3 流況変化の進行ベクトル図
(山崎・伊藤, 1982 より)

漁況の日々変動と対比してみると、CPUE が上昇している期間は「流れの停滞期間」に含まれ、この時期に CPUE が上昇している。流況の測得値は“シロイカ”

漁場の中心部で計測されたものではないが、大社沖漁場でも“シロイカ”漁況と流況との間に一定の関係のあることが示された。しかし、その関係は、小川(1983)が指摘した関係とは異なる。すなわち、大社沖では特定の流れが発達したときにはなく、むしろ流れが停滞したときに漁獲は上昇する傾向を示す。ここで用いた資料は別の目的で行なわれた調査から得られたものであるため、そうした差については言及できないが、漁況と流況との関係は海域によってかなり異なったものであることは十分示していると言えよう。こうした点については今後さらに事例研究を重ねる必要があると思われる。

文 献

- 小川嘉彦(1983) 日本海南西部沿岸漁場における“シロイカ”漁況と海況の日々変化の関係の一例. 水産海洋研究会報, 42, 1-9.
- 東海大学(1979) 大社湾の漁業の実態と神戸川の洪水の漁業に及ぼす影響予察. 大社湾漁業影響調査報告書, 145-216.
- 山崎 繁・伊藤靖彦(1982) 海洋調査. 大社湾海域総合開発事業予備調査報告書, 1-63.